

## 大学図書館の除籍に関する現状調査

永山 賀子

大学図書館において書架の狭隘化が進んでいるため、スペース確保のための除籍を行わざるを得ない状況にある館がある。しかし除籍とは、単に書架のスペースを作るためのものではなく、本来図書館が収集・整理・保存・提供を行っていく中で行われる作業の一つであり、スペースの効率的利用や、資料の有効利用を図る上で重要なものである。

本研究では、今後のより良い蔵書整備と資料提供に資するために、大学図書館における除籍の現状を規程や課題、再活用方法から明らかにし、今後必要な方策を検討することを研究目的とする。

対象は国立大学図書館とし、WWW 調査による除籍に関する規程の集計・比較と、除籍に関する現場の課題や除籍図書のリ活用についての質問紙調査の2点を行う。

WWW 調査で規程を得たのは48館であり、その他の38館には集計項目と同内容の質問紙調査を依頼した。結果、図書の不用決定の基準について汚損・破損、紛失、複本の順に多いと判明した。その他の基準の中では「保存の価値・必要がない」という内容が最も多かった。除籍とリ活用に関する質問紙調査では、書架スペースの確保が除籍の目的としても利点としても最も多く挙げられていた。また、書架スペースの確保のため、他館の所蔵状況や電子資料を代替に除籍を行う館もある。除籍による不利益としては資産の減少と業務上の負担が多く、次いで資料のニーズに対応できないことであった。業務上の負担に関しては、リ活用についての設問でも負担が大きいため売却や有償譲渡を行わないという回答があった。除籍図書のリ活用については無償譲渡、売却、有償譲渡の順に多く、古紙として売却するという回答も複数見られた。自由記述回答では、除籍を行う必要があるという積極的な館が多い一方、簡単な作業ではない、改善が必要であるという内容の回答も見られた。

調査結果から、館によって不用決定の基準の詳細さなど規程の充実度に差があること、曖昧な基準を採用する館も多いこと、用語の意味が統一されていないこと、そもそも規程が公開されていない館も多いことが明らかになった。図書館ごとに業務の手間や苦労を軽減し、除籍についての理解を得やすくするため、今後すべての館が細かく明確な公開規程を備えるべきであると結論付けた。また、質問紙調査の結果から、現場での課題は、書架スペースの確保、業務上の負担、資産の減少、除籍によって資料のニーズに対応できない例があることであると明らかになった。これらの課題を解決するためには全国的なシェアード・プリントの取り組みが有効であると考えられる。資料へのアクセスを保証したまま書架スペースの確保が見込まれるとともに、資産の減少も抑えることができる。業務上の負担が大きいという館が多い以上、すぐに取り組み始めることは難しいが、現状を改善するため少しずつ検討を進めていく必要がある。

(指導教員 逸村 裕)